

特集 『統合から10年』

◆◆◆ 研究所10年間の取り組み・出来事 ◆◆◆

生息分布を広げる野生動物

近年、野生動物の農林業被害が全国的に拡大して大きな問題になっています。長野県では、特にニホンジカが分布を広げて個体数が激増しています。また、ツキノワグマは人里周辺にまで下りるようになり、人身被害が懸念されています。野生動物にいったい何が起きているのかを把握するために、平成13年（2001年）度以来、捕獲されたシカやクマの年齢構成を調べています。シカは若い個体が多く、将来的に数が増えることが予想される典型的なピラミッド型の年齢構成を示しています。シカの個体数を抑えるために、このデータをもとに年間の捕獲目標数が計算されています。一方、クマでは、人里周辺で高齢の個体の割合が増える傾向にあります。これは、人里周辺を生息域にしているクマが増えたためと推定しています。このため、ク

マが餌付かないように、農地は電気柵で守ったり、生ゴミを適正に処理するなどの対策を提案しています。

（自然環境部）

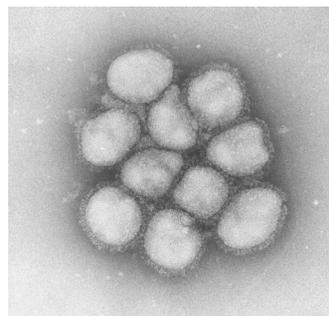


北アルプス岩小屋沢岳付近の稜線で撮影されたニホンジカ

新型インフルエンザ流行と検査対応

新型インフルエンザ（新型Flu）の流行は、平成21年（2009年）4月24日メキシコやアメリカでの感染報告から始まりました。それまで、東南アジアを中心に高病原性鳥インフルエンザウイルス（A/H5N1型）のトリへの感染拡大とヒトへの感染例が多数発生していたことから、この型からの新型Fluの発生が懸念されていましたが、予想していなかったブタ由来のA/H1N1型によるものでした。同年5月1日に国立感染症研究所より示されたリアルタイムRT-PCR法による検査法に基づき、5月4日には検査可能な体制を整えました。最初は感染疑いの全症例について、24時間体制で検査を実施していましたが、感染拡大後は集団発生例の一部や入院患者等を検査対象としました。これらの検査には当所感染症部員6名で当番を組み、通常業務を行いながら対応しました。国内で初発患者が確認さ

れたのが5月9日、それから1ヵ月以上経った6月13日県内で初めて患者が確認されました。検出後は急速に患者が増加し、新型Flu発生からの1年間で1,000検体の検査を実施し、845検体が陽性となりました。この新型Fluは病原性が低く、平成23年（2011年）4月1日から季節性インフルエンザの扱いとなった後は流行しませんでした。今シーズン（2013/14シーズン）



新型インフルエンザウイルス
（国立感染症研究所提供）

は堂々と流行の主流となっており、季節性として定着するのか今後の動向を注視したいと思えます。

（感染症部）